

氏名	盧 之筠
ヨミガナ	ルー チーユン
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第575号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 セメントの造形詩—疎外感とノスタルジー— 〈作品〉 落ちもの 帰り道は壁の果てに 虚ろな自画像 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	大巻 伸嗣
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	森 淳一
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	林 武史
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	

（論文内容の要旨）

自身の存在を確かめ、自身を作り出すためには、欲しいものを手に入れるより、「自分だけのもの」を作り出すことが必要だと考えた。これが、私が芸術を志したきっかけであり、「作品」を制作する動機である。

来日後、母国台湾の主体性の問題について意識し始め、「帰属」問題への戸惑いが、自身が感じた疎外感に近似していることに気付き、改めて主観や主体性を意識することになった。そしてここから、自身の「存在」と「居場所」について再考し、これまで経験した「疎外感」をテーマに作品制作を行ってきた。

本論文では、「疎外感」に関する社会的、心理的な分析から、自身の制作でそれを象徴するセメント素材の持つ意味と表現について考察する。

本論文は、以下の3章によって構成される。

第1章「セメント—疎外感とノスタルジー」では、疎外感に関する社会心理学から、芸術家という少数派が疎外感を経験しやすいこと、そして芸術家の視点から見た「現代生活における疎外感」について述べる。また、セメントが持つ「時間性」「虚無感」という二つの側面から、セメントという素材を選択した理由を述べ、疎外感とセメントの関係について分析する。

第2章「『彫刻』におけるセメント」では、第1、2節で彫刻の視点から、セメントの技法や特徴、石や鉄など他の素材との比較、セメントが持つ偶然性と特殊性について述べ、「連結の媒体」という概念を提示する。また「彫刻」を、「素材」「技法」を中心に解釈することへの疑問から、自身の「造形」は「素材」と「技法」が一体化したコンセプトであることを示す。そして第3節で、自身の制作でセメントが持つ四つの意味、「象徴性」「ミクストメディア」「身体性」「日記とモニュメントとの間」について言及する。

第3章「提出作品—『空白のノスタルジー』」では、まずこれまでの制作を振り返り、過去作からそれぞれの要素を抽出する。そしてそれとの比較から、三つの提出作品「落ちもの」「帰り道は壁の果てに」

「虚ろな自画像」を解説し、特に前章で述べた、セメントが異なる制作技法によって、様々な側面を持つことを確認する。

結論では、疎外感とセメントの関わりについてまとめた。「疎外感」を作品に変換することは、自身の存在を確認する行為であり、他者と異なる視点を発見する切り口でもあること。実在の作品を制作することによって、自身のアイデンティティーが再構成され、変化し続けてきたこと。そして自身の本質を掘り出すことが、新たな立体造形表現への可能性となることを提示する。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、自身のアイデンティティーのあいまいさを、セメントを素材に表現している筆者の創作論である。

筆者の母国台湾の国際的地位のあいまいさ、オランダ・日本の植民地支配を経て大陸と分断された「文化の断層」は、筆者が感じる疎外感や不安定さの大前提となっている。加えて、幼少期から30回にもおよんだ引っ越しによるディアスポラ感が、自身の存在と「居場所」のあいまいさを生み、やがて筆者のノスタルジーは、かつて住んだ家や場所ではなく、台湾建築に多いセメントに付着することになった。したがってセメントという素材は、筆者にとって疎外感やノスタルジー、アイデンティティーの不安定さが集約された存在となっている。

第1章「セメント—疎外感とノスタルジー」では、その一連の経緯と、セメントという素材の特性についてまず説明する。セメントは粉末から液状、固体へと姿を変え、混ぜる素材によってセメント、モルタル、コンクリートとなる加工性の高い素材である(本論文では三者をセメントとして総称)。その変幻自在さ、脆さ、時間性、混ぜる素材への従属性を、筆者が表現に最大限に生かそうとしていることを述べる。第2章「彫刻」におけるセメント」では、彫刻素材としてのセメントは当初、戦時の代用材として使用が始まったこと。筆者はむしろ壊れやすい素材としてそれを扱い、行為の痕跡をそこに残すことで、人と人、自己と他者の関係性を示そうとしていることを述べる。そして第3章「空白のノスタルジー」で、提出作品を解説している。

筆者の作品は、セメント彫像をつくるというより、セメントを用いたインスタレーションである。セメントを含ませたスポンジを踏んで亀裂の痕跡を残した提出作品「帰り道は壁の果てに」は、展示室の床全面にそれを敷いた個展(Crush Syndrome展、2015)と、花札のようなセメント板に乾く直前に植物や廃物を押し当てた「時のサンプリング一年計画」(2016)の合体形である。ただ、提出作品の「鏡のドロイング」「虚ろな自画像」では、ガラス面に液状のセメントで文字やドロイングを描き付けた絵具のような使い方をしており、審査会でも新たな段階の表現に入りつつあるという指摘があった。とくに「鏡」や「自画像」の出現は、他者との関係性を問うことから、自己省察へと目的が変化しつつあることを示している。ただここでの鏡は、自己の肯定ではなく、オットー・ミュールを引用しながら、鏡の破壊が他者からの影響の排除を意味すること。そして鏡の上に自身を描くことで、「他者が見る自分」を自己省察で塗りかえることを意味するとしている。

本論文は、自身のアイデンティティーの模索をセメントの特性に重ねた表現論として、リアリティの強い考察を展開している。学位にふさわしい論考として、審査会の承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

蘆之筠は国立台湾藝術大学において彫刻を学んだ後、2015年より本大学の博士課程に在籍し彫刻研究を行ってきた。台湾で制作された彫刻作品は古い家電製品や日用品などをアッサンブラージュしたものが多くカラフルな印象である。また、閉ざされた空間の中(テレビキャビネットや鳥かごなど)にイメージを閉じ込める作品が多く、観者の視線は現実空間から切り離され、幻想空間の内側へと導かれる。それに対し、日本で制作された彫刻作品は主にセメントが用いられており、カラフルな印象は抑えられ物質そのものが持つ固有のイメージを生かした作品が多く、観者の視線はイメージの外へと導かれるも

のへ変化している。この変化について作者は論文の中で「過ぎ去った特定の時間と空間への追求は、意味がない。ここから、その届かない存在への郷愁を、セメントの冷たく重みのある質感に託すことにしたのである。」と語っている。母国を離れることで生まれた感情（疎外感とノスタルジー）をセメントの質感と色に託し、母国が抱えた複雑な問題と自身の問題を再考し、3点の彫刻作品を提出した。

《落ちもの》

真鍮板を母体としたこの作品は、台湾の建物の窓に防犯を目的に取り付けられる「鐵窗（鉄格子）」の内側（ベランダ）の景色がモザイクで描かれている（タイルを用いたモザイクはセメントで真鍮板に接着されている）。観者は金槌で真鍮板の裏から作品を叩くように誘導され、叩いた振動によりタイルは徐々に剥がれ落ちる。それにより、観者は正面の様子を確認しようと作品の表と裏を往復することとなる。貼付けられたタイルが全て剥がれ落ちた瞬間に作品は完成する。真鍮板に残された痕跡は「鐵窗」の内側と外側、双方の空間を同時に浮かび上がらせ、「鐵窗」（境界）の存在は曖昧となる。平面的に見える作品ではあるが、作品の構造は彫刻的であり、空間性の強い作品と言える。

《帰り道は壁の果てに》

作者はセメントという素材を「頑丈で耐久性のあるもの」ではなく「弱く割れやすいもの」として捉えている。《帰り道は壁の果てに》は、2014～15年に発表した《stage01》、《Crush Syndrome》で用いた技法（スポンジの上にセメントを塗布し、硬化後に圧力を加えひび割れを発生させる）と、2016年に制作した《時のサンプリング一年計画》に用いた技法（硬化前のセメントの表面に植物等を貼り付け、硬化直前にそれを取り除き、植物等の痕跡をセメントに残す）がミックスされた表現となっている。セメントでできた細長い小道のような形は「壁の上」がイメージされており、表面には植物の痕跡と文字などが記されている。作者自身が作品の上を歩くことでできたひび割れにより、壁のイメージとセメント表面に残された痕跡は曖昧なものとなっている。「世界」、「国」、「人」を隔てる様々な「壁」の存在とそのあり方について、作者の身体を通した確認作業がセメントの表面にダイレクトに残された作品である。

《虚ろな自画像》

この自画像は全身鏡の裏側の面に文字やドローイングを「刻み」付けた作品である。自身と世界というものを「鏡像」を通して認識するのではなく、鏡の裏面にイメージを刻み付けることで掴み取ろうとしている。鏡の裏面から行われる執拗なドローイングにより銀膜等が剥がれ落ち、半透明な世界が浮かび上がる。鏡は本来の機能を失い、イメージの痕跡が残された薄く曖昧な境界となり、観者はその境界の向こう側に作者の存在を強く意識することとなる。ネガとポジ、光と影、存在と不在が刻まれたこの境界は、視線の貫通を許しているにもかかわらず、抵抗感を持った「彫刻」として存在している。

以上3点の提出作品は表現、内容において学位授与に値すると審査委員全員に認められた。

（総合審査結果の要旨）

盧之筠は、台湾から来日して以来、住み慣れた環境から離れて、初めて生まれた感情を元に「疎外感とノスタルジー」という観点から考察と彫刻制作をしながら研究をした。

母国をめぐる状況と「帰属」問題への戸惑いが、自身の感じた疎外感に近似している事に気づいた作者は、自身の存在と居場所について主観や主体性を再考しながら故郷の生活環境・風景から社会学的な視点や心理学的研究を深め、自身の観点から導き出そうとしているところは独自性があり興味深く感じられた。

作者は、家というものが記憶を孕み自身のアイデンティティーの一部を残していくことを見つけ出した。幼い頃から移動を繰り返してきた経験から、外来者として世界を見つめ、疎外感の根源を作り出したことを要因の一つと考えた。それがきっかけで筆者が成長するにつれ「国」「都市」「家」に対して他人と異なる視点を意識することとなった。

筆者は言う、「芸術家の疎外感とは、他者から理解されない孤独感から生じ、それが作品制作という行為に結びつけられている。社会的に特殊なこの状況を、「他者との同調性がない」のではなく、「他者とは異なる視点を持っている」と解釈し、他者と自身の認識との間に「ずれ」が生じた場合、外部に向け

て同一性を求めるより、まずは自身の内的要因を統合すべきだということにいたった。”この研究を通じ、筆者は自身と世界とがつながる方法について思考している。そして疎外感は、肯定的なものでもなく、否定的なものでもなく、混沌として曖昧なものであることを見つけ出した。また疎外感そのものを表現することから離れ、疎外感が生じたきっかけを台湾の日常風景や建築の中から導きだそうと試みていることは、筆者の置かれた環境と社会的な状況を自分なりに捉えたものであり独自性を持った論文となっている。

作品においては、セメントのもつ可塑的な素材性を利用して、意識と記憶、時間の凝結を作り出そうと試みている。それは意識と記憶を、セメントを媒介に様々なイメージへ結びつけ、造形の可能性を引き出したと言える。物質として日常的に私たちが経験しているセメント本来の「強い」というイメージから、儚さへと転換させる作品は、作者独特の他者と関係を作り上げている。また多様な展示を実際に行い、実験的な検証をしていることも評価したい。

筆者は、「彫刻とは何か」という問題が彫刻の技法や素材ではなく内的力の表現、生命の表現であると考えている。台湾での生活の中に、植民地時代や歴史的な問題が残っていることを見つめ、素材をメタファーに現代社会とのつながりをもう一度問い直そうと試みている。

実直なプロセスを繰り返し丁寧に検証した姿勢は評価に値する。今後どのような成果を導き、社会とアートをつなぐことになるのか期待していきたい。彫刻表現の可能性を持った研究に対し審査委員一同高く評価し学位授与に値するものと認める。